様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２７２６

研究課題名（和文）国際バカロレアの教育を生かした美術教育の研究

研究課題名（英文）Research on art education using International Baccalaureate education

研究代表者
小池　研二（Koike, Kenji）

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：９０５２８３８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：国際バカロレア（International Baccalaureate以下IB）を理論的，実践的に調査研究し，その趣旨や特徴を新学習指導要領に則った日本の中学校の美術教育に応用し，教育的効果について調査を行った。中等教育プログラム（Middle Years Programme以下MYP）を中心にディプロマプログラム（Diploma Programme以下DP），初等プログラム（Primary Years Programme以下PYP）の各プログラム間における美術教育の関連性や教科横断的な学習について調査した。IB美術教育について国内で研究協議会を行い成果を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
IBは構成主義的で探究的な学習であり概念理解を行っており，日本の学習指導要領の目指すところと近いと考えられる。また，IBは国際標準という性格から理論的な裏付けが明確に示されており理解がしやすい。本研究では，IBの美術教育及び，DPのTOK等，PYPの単元学習等の調査も行うことにより，美術単独の教科からの視点だけでなく教科横断的な視点からもIBの教育について調査した。また美術館博物館の社会教育施設で行われている教育についてもIBの視点から調査を行った結果，教科横断，概念理解と言った点で両者の共通点が見えてきた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the International Baccalaureate (IB) theoretically and practically. We applied the purpose and characteristics of IB to Japanese junior high school art education and investigated its educational effects. We investigated the relationship of art education and cross-curricular learning between the Middle Years Program (MYP), Diploma Program DP), and Primary Years Program (PYP). . We held a research conference in Japan regarding IB art education and presented the results.

研究分野：美術科教育

キーワード：国際バカロレア　美術教育　中学校美術　探究的な学び　教科横断的な学び　博物館美術館での教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2017 年に小学校及び中学校の学習指導要領が改訂された。この改訂では，探究的な学び，学び方を学ぶ学習方法，教科横断的学際的なカリキュラム等の学びを長く行ってきた国際バカロレア（以下 IB）の学びとより一層親和性が高まったと考えられる。一方，日本の中学校美術科の現状を見ると，生徒や保護者に美術教育の意義や有用性が十分理解されているとは言い難いものがあった。その中で，育成を目指す資質・能力が学習指導要領で明確に示されたことで，美術教育で何を学ぶのかを明確に示すことが求められるようになった。作品を作って終わりではなく，どのような力を身につけさせたいのかを具体的に生徒や保護者，社会全体に示すことがより一層求められるようになった。一方で，世界共通の学習システムである IB は学習理論，指導，評価の方法などが明確でわかりやすい。学習指導要領との親和性が高いのであるならば，IB の学習理論を研究し日本の教育に生かす意義が高まったと考えられた。

IB は学校内に閉じた学びではなく実社会とのつながりを重視している。学習指導要領の教科目標にもあるとおり，美術科の学習でも社会とのつながりが一層重視されている。美術館や博物館等の社会教育施設との連携も重要視されており，IB 教育の観点からこれらの教育について調査する必然性もある。また，日本でも教科間連携，校種間連携についての研究は多く行われており，中等課程（以下 MYP）だけでなく，ディプロマプログラム（以下 DP），初等プログラム（以下 PYP）の学びの連続性，DP の「知の理論（以下 TOK)」，初等プログラム（以下 PYP）探究的なユニット学習に見られる教科横断的な連続性ついても調査を行い，多様な視点から研究を進めていくことが必要となった。

２．研究の目的

研究の目的は以下の 4 項目である。

（1）これまでの研究を踏まえ，MYP を中心に IB の美術教育の研究を継続し，IB のカリキュラムの有効性を一層明らかにすること。

（2）IB の美術教育を応用し中学校の美術教育において探究的で主体的な学びを提案すること。

（3）小中高連携，教科横断型の学びについて IB の視点で調査すること，学習の仕方を示した Approaches To Learning（以下 ATL），や TOK，PYP の単元学習（探究の単元）を調査し教科を超えた学びを明らかにすること。

（4）社会とつながる美術教育に関連し美術館等での美術教育について IB の視点から調査すること。

３．研究の方法

本研究は

（1）文献等の理論研究，（2）研究協力者等の研究フィールドにおける実践研究，（3）国内外の IB 実施校，社会教育施設への現地調査の 3 つを研究の柱にして行った。(1) では IB 機構（IBO）及び文部科学省が発行する公式ガイド等を分析した。(2) では IB 認定校ではない国立大学附属 A 中学校で IB が示す学習スキルを活用した学習及び探究の問いを通して概念を学ぶ授業の分析を行った。(3) では国内外の IB 実践校での現地調査（授業参観，児童生徒，教員へのインタビュー）を行った。

４．研究成果

（1）文献等の調査：国際バカロレア機構（IBO）発行の公式ガイドブック等の資料を中心に調査し以下を得た。

①MYP 芸術の改訂について

2022 年 9 月または 2023 年 1 月から適用される MYP 芸術について公式ガイドブックを調査した[1)]。調査にあたって，IB 公式ワークショップ（2022 年 8 月，オンラインで実施）に参加し最新情報を得た。文献及びワークショップでの講義等により，最新の MYP について以下がわかった。IB では各教科群で目指すべきねらい（Aims）と目標（Objectives）が示されている。

表１：IBMYP 芸術のねらい（Aims）　新旧の比較

新 2022 年 9 月または 2023 年 1 月から適用	旧 2014 年 9 月または 2015 年 1 月から適用[2)]（研究者の試訳）
MYP 芸術のねらいは，生徒が以下のことを促し，できるようにすることです：	
・生涯にわたって芸術とのかかわりを楽しむ	・芸術を創造し演じる
・さまざまな時代，文化，文脈にわたって芸術を探究する	・専門分野に特化したスキルを培う
・芸術とその文脈の間の関係性を理解する	・創造的な探求と（自己）発見することの向上に取り組む
・芸術の創作や実演に必要なスキルを培う	・研究と実践を意図的につなげる

・アイデアを創造的に表現する	・芸術とその文脈の間の関係性を理解する
・若い芸術家としての自分の成長を振り返る	・芸術に反応し，芸術について考察する
	・世界をより深く理解する

表 2：IBMYP 芸術の目標（Objectives）　新旧の比較

新 2022 年 9 月または 2023 年 1 月から適用	旧 2014 年 9 月または 2015 年 1 月から適用（研究者の試訳）
A:調査 Investigating	A:知識と理解 Knowing and understanding
B:発展 Developing	B:技能の発展 Developing skills
C:創作・実演 Creating/Performing	C:創造的思考 Thinking creatively
D:評価 Evaluating	D:鑑賞（応答）Responding

目標は 4 つの評価規準（Assessment criteria）になっている。新旧共に制作だけを評価の対象とせず，調査研究，思考，振り返りを通して芸術全般を学習することを目標としていることがわかった。改訂後では以下の通りそれぞれの評価規準の具体的な評価項目が示されている。
A:調査「ムーブメントのジャンルの調査」「芸術作品やパフォーマンスの批評」
B:発展「実践的にアイデアを探究」「芸術的意図を探究テーマに沿って明確に提示」
C:創作・実演「芸術作品を創作または実演」
D:評価「自分の芸術作品やパフォーマンスを評価」「自分の成長を振り返る」
②DP における知の理論 TOK の調査
TOK は「課題論文（Extended essay）」「創造性・活動・奉仕（Creativity, activity, service）」と共に DP の核（コア）の 1 つとして位置づけられている [3]。DP で学ぶべき 6 つの教科群をつなげる学習で，DP における教科横断的な学習であり，教科群を超えた学びである。TOK は「知識に関する問い」（knowledge question）の探究が学びの中心となる。「知識に関する問い」は知識について問うものであり，知識そのものに対して生徒が考えていく学びで，「エビデンス」「確実性」「価値観」「解釈」などの概念から導かれる。最終的には，TOK 展示と TOK エッセイの 2 つの評価課題がある。DP は大学入学資格のプログラムであるため教科の独立性が他のプログラムに比べて強い。そのプログラムをつなげるのが 3 つの核（コア）である。特に TOK は知識そのものについて教科の枠を超えて考えて行く学習である。TOK 展示は今回の改訂で新たに設定された課題で，「私たちを取り巻く世界に TOK がどのように顕在しているかを深く考察」するものである。生徒は 3 つの事物または画像，それに付随するコメンタリーで構成される展示を行い教師が採点する。TOK は物事を批判的に概念的に深く考える学びであり，IB の学習体型を知る上で重要である。2022 年 4 月にオンラインの公式ワークショップに参加し最新情報を得た。
③DP における美術の調査
DP「芸術」のねらいは，1. 生涯にわたって芸術とのかかわりを楽しむ，等 6 つあり，さらに「美術」のねらいとして，7. 個人及び文化の文脈の影響を受けた作品を制作する，等 3 つ，合計 9 つのねらいがある。また，評価目標 1：特定の学習内容の知識と理解・評価目標 2:知識と理解の応用と分析・評価目標 3:統合し分析，判断する力・評価目標 4:適切な技能や技法の選択，活用，及び応用の 4 つがある。スタンダードレベル（SL），ハイヤーレベル（HL）のコースが設定されており，学習時間，評価課題の難易度に差がある。実践内容課題は「比較研究」「プロセスポートフォリオ」「作品発表」があり，その内容，割合等は以下である。

表 3：DP 美術の評価課題

評価課題	内容	割合	評価者
比較研究	少なくとも 3 作品について比較し，考察	20%	外部評価（採点官）
プロセスポートフォリオ	2 年間で行った，実験，探究，修正，改善のエビデンスとなる資料を提出	40%	外部評価（採点官
作品展示	複数の完成作品を選び，提出（SL4－7 作品，HL8－11 作品）。キュレーター・ステートメント，各作品のキャプションを提出	40%	内部評価（担当教師）

（2）研究協力者等の研究フィールドにおける実践研究
研究協力者の所属校である国立大学附属 A 中学校で実践研究を行った [4]。IB には ATL スキル（Approaches to Learning skills）と呼ばれる学び方を学ぶためのスキルが設定されている。ATL スキルは・「コミュニケーション」・「社会性」・「自己管理」・「リサーチ」・「思考」の 5 つのカテゴリーが全てのプログラムで設定されている。本研究では ATL スキルを授業当初から生徒に示し，生徒に理解させた上で，学習に取り組ませることにより，生徒がスキルを自覚して学習に生かせるかをアンケート結果から分析した。自然素材を生かした木工の制作を通して良さや美しさといった概念理解をさせるために「探究の問い」を設定し，問いを考えながら学習を行い，より深い学びができるかどうかを生徒の記述から分析した。その結果 ATL スキルについて授業で説明したことについては，自由記述の内容を分析した上でも，質問の仕方等やや難解であった批判的思考を除きおおむね 70%から 85%以上という結果になった。ATL スキルについて具体的に

説明をすれば多くの生徒がスキルの意味を理解して学習の各場面で自覚していることがわかった。また，探究の問いからは，工芸品の美しさや，工芸の必要性について，制作活動を通して理解を深めていることがわかった。一方学習の内容に ATL スキルがどの程度生かされているかについては今後の課題となった。

（3）国内外の IB 実践校での現地調査

①2021 年度の現地調査

・PYP 実施校の調査　2021 年 11 月に関東地方の私立 B 小学校でのインタビュー調査を行った。管理職から UOI（探究の単元）について話を聞くことができた。「学習指導要領に対応するように　例えば国語探究というように国語の時間を組み入れて，時間数を確保している。UOI は，週 5 時間は確保している。6 つの単元を毎年行う 5 週くらいで一つずつ行う。」等の話を聞くことができた。学習指導要領との整合性を持たせることが大切であり難しい印象を受けた。一方 UOI の学びは児童にとっても興味関心が高く学習が好きになり有効であることが確認できた。また，英語学習については重視しているとのことだった。PYP は本来言語の指定は無いが DP を見据えた場合英語教育が大切であるとの見方を持っていることが確認できた。

・DP 実施校の調査　2022 年 1 月に関東地方の県立 C 高等学校を調査した。　TOK 展示が公開されたのでその様子を参観した。以下は発表時の記録である。（生徒 1 の例）IA プロンプト（問いのテーマ）は「私たちの知識の消費や獲得に影響を及ぼすと言う点において，専門家はどのような役割を果たすか」であった。事物 1 は，「イギリスのイラク戦争報告書」を取り上げながら，イラク大量破壊兵器はなく，専門家が嘘をついていたこと，誤った知識によって専門家は世論を操作していることを述べていた。事物 2 は，「中国の教科書」を取り上げて，　価値観を統制していることを述べた。中国の教科書には，「現代マルクス主義」「党と国」「社会主義を学ぶこと」があり，そこには　価値観の違いがあること，それらが「政治観を作る」ことを述べた。そして事物 3 は，「年代別の重視しているものを扱った，日テレニュース」を取り上げていた。このニュースでは，10 代はコロナ対策，30 代は子育てを重視しておりここから人々は自らの立場からものごとを考えていることを述べていた。そしていわゆる専門家は政治を与える者であること，専門家とは政治家のことだと思うとも述べていた。これらを見ると事物を介して様々な問題を自分のこととして捉え，いわゆる教科書的な知識を学ぶのではなく独自の考えを展開させようとしていることがわかった。

②2022 年度の調査

・DP 実施校での美術の調査　2023 年 2 月に関西圏にある DP 実施校の公立 D 高等学校を調査した。DP 美術で該当している生徒は 3 名（参観日は 1 名欠席）で当日の授業は DP 美術の課題の 1 つである「比較研究」や今後展覧会をしていくための「作品制作」「作品展示」について生徒と教員とでディスカッションしていた。ある生徒は，広重，モネ，ホックニーそれぞれの「日の出」を題材にした作品を比較研究することを教員と相談していた。指導の中で形式的特性をよく観察していくこと，機能と目的を論ずる前によく観察することが必要である等のアドバイスを受け今後の研究につなげていた。

・DP 及び MYP 実施校での美術の調査　2022 年 12 月に公立の中高一貫 E 中等教育学校で MYP 及び DP の美術を参観した。MYP は木版画の授業で，ひたすら木版画にはどのような作品があるかを，文献や PC 等を使った調査研究をしていた。担当教員に話を聞くと評価規準は学習指導要領と離れた感じがする，調査活動をさせると授業時数が不足するので，定期テストをやめる等の工夫をしてはどうかとの意見を持っていた。DP 美術は特徴的だったのは，全員がまったく違う作品を作っていたことである。教室内外でミニ展覧会を行うため展示も試験的に行っていた。調査研究活動と多様な表現活動というように中高での学習内容の差が大きかったが，概念的な理解を探究していく学びは中高で一貫している印象を受けた。

・MYP 実施校と PYP 実施校を調査　2022 年 12 月に公立の F 中学校，G 小学校を調査した。同一地域の小中学校で IB を取り入れたことについて担当指導主事からの説明では，「探究の学びからスタートした。　地域保護者が積極的に学校教育に関わっていく活動を行っていた。このような中で，町の教育思想と IB が合致して，IB 教育がスタートした。IB は学習指導要領とも合致しているので，行うことができた」とのことであった。また教員にインタビューをしたところ，「楽しい自分の能力アップになる。国のやっていることと親和性がある。教科輪切りからユニットで学ぶようになっている」等の回答があった。IB が大規模な進学校のためにあるのではなく，地域の学校で探究的な活動を行うために適したシステムであることがこの調査でわかった。

③2023 年度の調査

DP 実施校での美術の調査　2023 年 7 月に九州沖縄地方の H 高等学校の「作品展示」を参観した。展示は DP 美術の重要な評価対象である。県立美術館のギャラリーを借り切り，生徒が６～９作品程度を，コーナーごとに展示をしていた。作品だけでなく，参観当日は生徒がその作品の前で鑑賞者に向けて作品説明を行った。ある生徒は　「美，美しいもの」というテーマで以下の 9 作品を示し，それぞれの作品について説明をしている。美しいものとは何かを単なる美しい物体を描くのではなく，多様な表現方法や材料によって多方面から表現し，作品を通して自身が持っている美の概念について言葉を使って表している。特に「美しいと感じるとき敗北感を感じる」という言葉は表現者として美を深く考えている印象を受けた。

表 4：DP 作品展示の例

作品	作品の内容	説明の内容
1	6 枚の夕日の写真	美には 2 つの種類がある　自然的美と人工的美，夕日は自然的美
2	抽象的な平面作品 6 枚	美しいと感じるとき敗北感を感じる
3	アボリジニ？の顔	人工的美カラフルなタトゥー　文化の価値観
4	立体	ホワイトトレーに顔の一部
5	立体	化粧してる顔　自分たちを商品化している
6	7 枚のまなざしの顔の一部	不信感を感じるような目。鑑賞者と目が合うようにかかれている
7	ガラスの破片の花の半立体	共存すること
8	虹色の糸が張ってある半立体	触れたくても触れられない虹
9	顔　表情がなくドットで表現	他者から見て私たちは常に欠けている

④海外調査　2020 年 2 月に東南アジアの日本人学校を調査した。IB 実施校ではないが，「IB の 10 の学習者像」にある「挑戦する人(Risk-taker)」のような人間がこれからは必要であり，そのような教育をする IB を導入したいとのことであった。また，校内研修会で TOK について学んでいるとのことであった。

2023 年 3 月にドイツのボン国際学校，デュッセルドルフ国際学校を調査した。ボン国際学校では，MYP 美術，PYP 美術，DPTOK を調査した。MYP 美術では展示してあるマスクの作品について生徒や教員にインタビューをした。セネガル出身でバスケットボールの選手をしている生徒は，鋭い歯を持った象をイメージしたマスクを作っていたが，出身地や動物好きである正確を象で表し，バスケットボールでは激しくプレイすることを歯で表しているとのことであった。PYP 美術でも作品について小学生が積極的に説明をしていた。また，PYP のユニット学習について教員に聞いたところ，ユニットは 3，4 年生では環境のための環境保護とか，動物保護とか，自然保護，5 年生では資源をどう扱うかなどを自分たちの生活と結びつけて考えさせるとのことであった。デュッセルドルフ国際学校でも PYP，MYP，DP の美術を参観し教員や生徒にインタビューをした。

2024 年 3 月には香港カナディアン国際学校，ホーチミン市国際学校を調査した。香港カナディアン国際学校では，MYP，PYP の美術を参観して教員にインタビューした。ここでも概念理解をする学習が行われていた。ホーチミン市国際学校では，生徒が参加している演劇の発表を調査できた。この演劇は生徒が自主的に参加する活動であるが，ドラマ教育の一例として興味深かった。

⑤海外博物館美術館調査　2023 年 3 月にドイツのボン美術館，ケルン市ラウテンシュトラウフ・ヨーフト博物館，デュッセルドルフ市クンストパラストでの教育活動を IB の視点から調査した[5)]。ボン美術館では幼児対象のワークショップに参加し，教育担当学芸員にインタビューした。幼児教育や障害を持った人たちの教育，学校との連携というように多様な活動を考えて運営しているとのことであった。クンストパラストでは教育担当学芸員にインタビューをした。ラウテンシュトラウフ・ヨーフト博物館ではケルン市の博物館教育について教育普及担当学芸員や博物館で働いている教員，市の担当者から話を聞いた。ここでは，教科横断的な学びについての教育活動，LGBYQ 等を扱った企画，略奪文化財と言う視点で美術品を考えることができた。これらは TOK 等でも扱われるべき内容であり，IB の視点から美術品について考えることができた。

2024 年 3 月にはドイツのベルリン市内の美術館博物館，ボン美術館を調査した。ベルリン市内の美術館博物館では，それぞれの展示方法，展示の意味を調査した。ベルリン自由大学附属のヨーロッパ博物館では，養蜂，月経をテーマとした展示を行っておりテーマの斬新さ，多様な学問分野を展示することについて考えさせられた。ボン美術館でもゲーテの展覧会を行っていた。多様な学問をテーマ取る教科横断的な視点を考えることができた。2024 年 3 月には香港 M＋美術館も調査した。ここでは開館前から積極的に学校や地域とつながった教育活動を行っており，社会とのつながりを重視していることがわかった。

参考文献

1)「中等教育プログラム（MYP）「芸術」指導の手引き（2022 年 9 月または 2023 年 1 月から適用）」2022，International Baccalaureate Organization
2)「Middle Years Programme Arts guide For use from September 2014/January 2015」2014，International Baccalaureate Organization
3)「ディプロマプログラム（DP）「知の理論」（TOK）指導の手引き」2020，International Baccalaureate Organization
4）小池研二，「国際バカロレア中等教育プログラムを生かした美術の学びについて（2）―工芸題材における ATL スキルの活用と探究的な学び―」『美術教育学研究』 53 (1)，大学美術教育学会，105-112，2021
5）小池研二，「ドイツ，ノルトラインヴェストファーレン州の美術館博物館における鑑賞教育」『横浜国立大学教育学部紀要．I，教育科学』巻 7,90-108，2024

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小池研二	４．巻 53
２．論文標題 国際バカロレア中等教育プログラムを生かした美術の学びについて（2）　―工芸題材におけるATLスキルの活用と探究的な学び―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学美術教育学会「美術教育学研究」	６．最初と最後の頁 105-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小池研二	４．巻 7
２．論文標題 ドイツ，ノルトラインヴェストファーレン州の美術館博物館における鑑賞教育	５．発行年 2024年
３．雑誌名 横浜国立大学教育学部紀要．I，教育科学	６．最初と最後の頁 90-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小池研二
２．発表標題 国際バカロレア中等教育プログラムを生かした探究的な美術の学び
３．学会等名 美術科教育学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関